

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

キングダム 運命の炎

2023 年 / 日本映画

配給：東宝、ソニー・ピクチャーズエンタテインメント / 129 分

2023 (令和 5) 年 8 月 11 日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

Data

2023-90

監督：佐藤信介

脚本：黒岩勉 / 原泰久

原作：『キングダム』原泰久

出演：山崎賢人 / 吉沢亮 / 橋本環奈

／清野菜名 / 満島真之介 /

岡山天音 / 三浦貴大 / 杏 /

山田裕貴 / 高嶋政宏 / 要潤

／加藤雅也 / 高橋光臣 / 平

山祐介 / 片岡愛之助 / 山本

耕史 / 長澤まさみ / 玉木宏

／佐藤浩市 / 大沢たかお

👁️👁️ みどころ

『インディ・ジョーンズ』や『ミッション：インポッシブル』等の、ハリウッドの人気シリーズが次々と終了していく中、邦画の人気シリーズ『キングダム』は大成功！主要なキャラも完全に定着した。

第 2 作のテーマは「蛇甘平原の戦い」だったが、本作の前半は“紫夏”編に、後半は“馬陽の戦い”編にバランス良く大別されている。紫夏編は TV ドラマ『コウラン伝 始皇帝の母』や塚本青史の小説『バシレウス 呂不韋伝』と合わせて観れば、より面白く、かつ理解が深まるはずだ。

他方、「馬陽の戦い」は、「関ヶ原の合戦」とも対比しながら、双方 15 万ずつの将兵の配置図をしっかりと確認したい。また、そこでは、秦の大將軍・王騎（大沢たかお）が信率いる百人隊を“飛信隊”と名付け、“ある特殊任務”を与えたのがミソ。当然それは過酷な任務だが、もしそれを達成することができれば・・・？

このシリーズはメチャ面白い！早くも第 4 作への期待が高まるばかりだ。パンフレットも購入し、しっかり勉強して、次作に備えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■シリーズ化大成功！主要なキャラも定着！こりゃ面白い■□■

原泰久原作の人気漫画『キングダム』がはじめて映画化されたのは 2019 年。秦の始皇帝は、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『始皇帝暗殺』（98 年）（『シネマ 5』127 頁）や張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『HERO（英雄）』（02 年）（『シネマ 3』29 頁、『シネマ 5』134 頁）が“本場モノ”の代表だが、かつては勝新太郎が主演した 70 ミリ大作の代表『秦・始皇帝』（62 年）という日本版もあった。近時は TV ドラマの『ミーユエ 王朝を照らす月』が始皇帝の高祖母（おばあさんのおばあさん）である宣太后を、『コウラン伝 始

皇帝の母』が始皇帝の母親、李皓綱（リ・コウラン）を描いている。他方、塚本青史の小説『バシレウス 呂不韋伝』も大ヒットしているから、始皇帝については、その暗殺をめぐるスリリングな物語だけではなく、始皇帝＝嬴政の出自や人質とされた幼少期についてのスリリングな物語への興味も増している。

原泰久の『キングダム』は、そんな『ミーユエ 王朝を照らす月』、『コウラン伝 始皇帝の母』、『バシレウス 呂不韋伝』等とは全く別に、原のオリジナルな視点から彼流の独創的なキャラを多数作り出した上で、彼流の『キングダム』を構成したものだ。そのシリーズ第1作となる『キングダム』(19年)、『シネマ43』274頁)では、戦災孤児の信(山崎賢人)と中華統一を目指す嬴政(吉沢亮)という2人の主人公を軸に、影武者、替え玉、双子という面白い“仕掛け”が大成功！さらに、政と“山の民”との同盟や、一匹狼的な大將軍・王騎(大沢たかお)の登場など、マンガチックなキャラクターも面白い。佐藤信介監督が演出した『キングダム』では、意外にもそれらの多種多様なキャラクターが嬴政による“中華統一”という壮大な夢にうまくマッチしていた。さらに、『キングダム2 遙かなる大地へ』(22年)、『シネマ51』158頁)では、秦と魏との「蛇甘平原の戦い」をテーマとして壮大な物語を展開させていた。しかして、『キングダム 運命の炎』のテーマは？

2023年の夏は、『インディ・ジョーンズ』シリーズ第5作、『ミッション：インポッシブル』シリーズ第7作、『ロッキー』シリーズ第3作等のシリーズモノが次々と公開されたが、『キングダム』のシリーズ化が大成功であることは、本作の人気を見れば明らかだ。信、嬴政、山の民、そして王騎等のキャラは定着化してきた上、それまで「五丈原の戦い」くらいしか知らなかった、日本の中国史ファンにも、第2作では「蛇甘平原の戦い」を楽しませることができた。しかして、本作では、秦と趙による「馬陽の戦い」が描かれるのでそれに注目。関ヶ原の合戦もワーテルローの戦いも興味深い、さて紀元前220年代の「馬陽の戦い」とは？それを指導した將軍たちは？そして現場で展開されたさまざまな戦法とは？さらに、第2作で5人隊を率いた信は、第3作では百人隊＝飛信隊の隊長として重要な役割を演じるので、それに注目！

■□■戦国七雄形成図は？合従連衡策とは？■□■

秦の始皇帝の物語を楽しむためには、最低限、春秋戦国時代(BC770～221年)における「戦国七雄の形成図」と「合従連衡策」を理解する必要がある。そこで、ここにも『キングダム』に掲載した形成図を再び掲げておく。

前述したように、『キングダム2 遙かなる大地』がテーマにしたのは秦が魏と戦った「蛇甘平原の戦い」だったが、本作のテーマになるのは秦が趙と戦った「馬陽の戦い」だ。ちなみに、趙は『始皇帝暗殺』や『HERO(英雄)』で描かれた、「十歩必殺」の剣で始皇帝暗殺を狙う刺客「無名」の出身国。また、趙は『ミーユエ 王朝を照らす月』でも描かれた秦の大將軍「白起」によって、多くの趙の敗残兵が生き埋めにされてしまった国だから、秦への恨みは深い。



■□■趙が侵攻！その数は？総大将は？VS 秦の大將軍は？■□■

しかして、今、秦への侵攻を目指す趙の軍隊の数は15万。それを率いるのは、総大将・龐煖（吉川晃司）に代わって指揮をとる大將軍の趙柱（山本耕史）だ。彼は平原での戦いを避けようとする王騎の狙いを見抜き、荒地での対決に奮起したが……。また、趙軍の右翼を指揮し、秦軍を追い詰める副将が馮忌（片岡愛之助）、そして、趙軍の左翼を守るのが、かつて長平の戦いで秦に虐殺された趙国民の憎しみを背負って戦う趙軍の副将・万極（山田裕貴）だ。他方、趙軍侵攻の報告を受けた嬴政は直ちに“朝議”を開いたが、そこに参加するのは、丞相の呂不韋（佐藤浩市）、呂氏四柱の1人で文武に優れた天才軍師・昌平君（玉木宏）や昌文君（高嶋政宏）、肆氏（加藤雅也）たちだ。急遽召集された秦の軍隊の数もおおよそ15万。そこでの大問題は誰を総大将として任命すべきかだが、興味深いのは、そこにしばらく第一線を退いていた秦の大將軍・王騎が登場してきたこと。その背景には、いかにも中国的な“裏の事情”があれこれあるので、それらを含む側近たちの駆け引きと“朝議”の様子はあなた自身の目でしっかりと。

ただ1つだけ、ここで私が明記しておきたいのは、王騎が嬴政に対して、「なぜ、あなたは“中華統一”を目指しているのか？」と本質的な質問をし、それに対して政が真正面から答えることだ。この“問答”は紀元前220年当時のことだが、考えてみれば、2023年の今、習近平国家主席に対して、政と同じく「あなたは、なぜ今、“中国梦”（中華民族の夢）＝中華民族の統一を目指しているのか？」と質問すれば、一体どんな回答が出されるのかをよく考えながら、本作のこの問題提起をしっかりと考えたい。

■政が中華統一を目指すのは紫夏との約束を果たすため！■

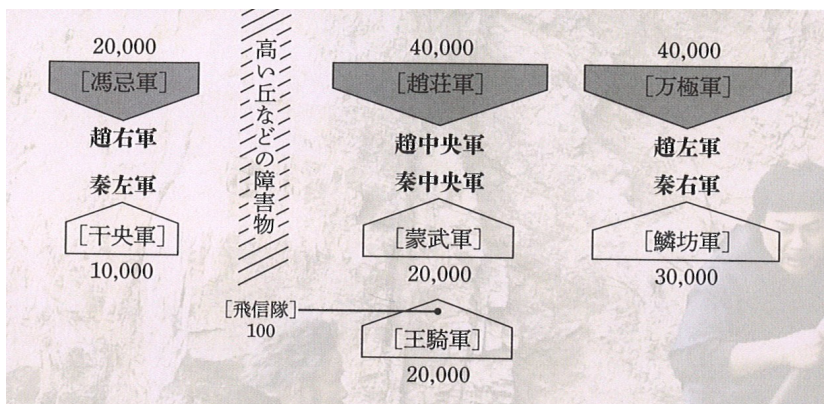
『チコちゃんに叱られる』はNHKには珍しく刺激的かつ挑発的な番組だが、ここでは毎回「〇〇が△△するのは一体なぜ？」という質問が出され、それに答えられないと「ポーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られてしまう。王騎から「あなたが中華統一を目指す理由は何か？」と質問された政がまともに答えられなければ、政もチコちゃんから「ポーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られそうだが、そこで政はしっかり「紫夏との約束を果たすためだ」と答えたから、偉い。

私は『バシレウス 呂不韋伝』で、はじめて呂不韋なる人物を知り興味を持ったが、本作に登場する女性・紫夏（杏）は原泰久原作の『キングダム』にのみ登場するオリジナルな女性だ。『コウラン伝 始皇帝の母』では、趙の人質とされていた秦国の26番目の王子である嬴異人（嬴子楚、嬴政の父）が、呂不韋と李皓鏘の協力によって秦国に連れ戻されるストーリーが前半のハイライトだったが、その後で趙の人質になっている政を秦に連れ戻す役割を果たすのが紫夏だ。信と共に5人組の1人として素晴らしい殺陣を披露する女性・羌廋（清野菜名）や、第1作で山の民のリーダーとして独特の存在感を見せていた楊端和（長澤まさみ）はシリーズ全体の中で長く活躍するはずだが、紫夏は本作のその役割だけで「お役ごめん！」となるはずだから、その働きぶりに注目！

第1作では、信の友人の漂（吉沢亮）が政の犠牲になり、第3作では政を秦に送り届けるために紫夏が犠牲になるが、政はそんな犠牲の上に秦の王になっていくことを如何に考え、そして中華統一の夢に如何に結びつけていくの？それは、あたかも現在の習近平が目指している“中国梦”と同じようにも見えるが、さてその実態は？

■馬陽の戦いの布陣は？戦いはどこから？飛信隊の役割は■

東軍9万 VS 西軍8万が激突した、天下分け目の関ヶ原の戦い（1600年）の布陣は、石田三成率いる西軍方がもともと有勢だったそうだが、松尾山の上に陣を敷いていた小早川秀秋の裏切りによって西軍は崩壊した。しかし、パンフレットには「馬陽の戦い」開戦



時の布陣が描かれているので、それを転載しておきたい。マイクも双眼鏡もないあの時代に、10万人単位の軍隊をどうやって動かしたのかについてはいろいろ疑問もあるが、馬陽の戦いで、秦の総大将・王騎と趙の総大将・趙荘が見せる指揮ぶりはメチャ面白いのでそれに注目！王騎に従う副将は蒙武（平山祐介）、騰（要潤）、壁（満島真之介）、干央（高橋光臣）たちだが、彼らはそれぞれ如何なる役割を？

「馬陽の戦い」は、王騎が左翼軍・干央軍1万に、趙の右翼軍・馮忌軍への襲撃を命じたところから始まったが、これは趙の趙荘の読み筋通り。しかし、そこで意外だったのは王騎が信を百人隊の隊長に任命した上、これを飛信隊と名付け、ある特殊任務を与えたことだ。本作後半では、この飛信隊の活躍がハイライトとして登場し、信や羌虜たちの目覚ましい働きと、王騎の軍略の素晴らしさが実証されていくので、それに注目！さあ、飛信隊の役割とは？わずか100人の部隊が10万人規模で展開している戦場でどんな役割を果たせるの？本作はそれを実感できる、稀に見るエンタメ戦争劇になっているので、それをたっぷり楽しみたい。

■□■シリーズ第4作は如何に？その期待は高まるばかり！■□■

本作と同じ日に観た『リボルバー・リリー』（23年）のラストは、無事に任務を終えたリボルバー・リリーこと小曾根百合が、愛人（？）の岩見良明と共に“逃避行”と洒落込む中、新たな敵となる男として、鈴木亮平扮する眼帯の男が登場するところで終わった。これは、同作のシリーズ化が決定したことを明確に示すものだが、そんな風にシリーズの次作をほんの少しだけ最後に見せつける手法は、近時、定着化している。したがって、それは本作でも同じ。

本作最後に“チラリズム”として見せるのは、第1作に登場した“山の民”のリーダーたる楊端和（長澤まさみ）だから、早くもシリーズ第4作への期待が高まるばかり。シリーズ第2作たる『キングダム2 遥かなる大地』は「蛇甘平原の戦い」一本に絞ってストーリーを構成したが、シリーズ第3作たる本作は明確に、前半の「紫夏編」と後半の「馬陽の戦い編」に分けて構成したが、そのバランス感は絶妙だった。シリーズ第4作では本作で大活躍した王騎もきっと最期を迎えるだろうが、さてその構成は如何に？期待は高まるばかりだ。

2023（令和5）年8月15日記